

	[2]
氏名	平田 恵美子 <small>ひらた えみこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 247 号
学位授与の日付	平成 29 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	広津柳浪「深刻小説」について—『変目伝』、『黒蜥蜴』、『亀さん』、『今戸心中』、『河内屋』、『浅瀬の波』、『雨』における江戸文学とのかかわり—
論文審査委員	主査教授 関 肇 副査教授 増田 周子 副査教授 山本 卓

論文内容の要旨

本論文は、江戸文学とのかかわりという観点から、広津柳浪の『変目伝』、『黒蜥蜴』、『亀さん』、『今戸心中』、『河内屋』、『浅瀬の波』、『雨』を取り上げて考察したものである。論文の構成は以下の通り。

序論

第一章 広津柳浪『変目伝』論——「人は美目より心」に託した伝吉——

はじめに

第一節 卸小売店埼玉屋と薬種店仁寿堂の社会的地位の格差

第二節 伝吉の「尋常」でない身体

第三節 伝吉の「春を思う心」

第四節 「人は美目より心」

第五節 伝吉の道行

おわりに

第二章 広津柳浪『黒蜥蜴』論——歌舞伎とのかかわりを中心に——

はじめに

第一節 青蜥蜴から黒蜥蜴へ

第二節 お都賀と与太郎

第三節 悪玉としての吉五郎

第四節 夫婦の絆

おわりに

第三章 広津柳浪『亀さん』論——野州烏山の近代化と亀麿の悲劇——

はじめに

第一節 野州烏山の「田舎訛言」

第二節 烏山町の社会構造の変化

第三節 お辰と遊女町

第四節 亀暦の悲劇

おわりに

第四章 広津柳浪『今戸心中』論——『春色梅児誉美』と吉里の心のあり方——

はじめに

第一節 『春色梅児誉美』との共通点

第二節 春水人情本との相違点

第三節 吉里の心の変化

おわりに

第五章 広津柳浪『河内屋』論——妻としての規範から浮かび上がるもの——

はじめに

第一節 日本橋横山町の変化

第二節 お染に見る儒教的女性像

第三節 お染の妻としての規範との対立

第四節 『河内屋』のお染と「骨ぬすみ」のお町

おわりに

第六章 広津柳浪『浅瀬の波』論——お勝の過誤による悲劇——

はじめに

第一節 作中における洲崎

第二節 お勝の運命の予兆

第三節 お勝・三吉・弁三の人物造形

第四節 過誤による悲劇

おわりに

第七章 広津柳浪『雨』論——『雨』のお八重と「段だら染」のお妻——

第一節 貧民街の窮状

第二節 『雨』の吉松と「段だら染」の美代吉

第三節 『雨』のお重と「段だら染」のお市

第四節 お八重と吉松の夫婦愛

おわりに

結章

参考文献

初出一覧

第一章「広津柳浪『変目伝』論——「人は美目より心」に託した伝吉——」では、登場人物の営む洋酒店と薬種店の社会的地位の格差、主人公・伝吉の身体的な異形性、「春を思ふ心」の芽生えとその屈折、「人は見目より心」という言葉に託された夢想、クライマックスにおける道行文的な表現技巧について論じ、「人は見目より心」という言葉に翻弄されて人生を狂わせていく主人公の不幸の必然性を跡づけた。

第二章「広津柳浪『黒蜩艇』論——歌舞伎とのかかわりを中心に——」では、作者がこ

の小説を着想する契機となったと述べている「亭主なげるにや、何の手が好かる、青い蜥蜴に蠅取蜘蛛まで」という小唄が、幕末期に流行した越後の大工殺しの瞽女の小唄であり、歌舞伎「糸時雨越路一颯」にも取り入れられていたことを明らかにし、また、登場人物たちには、鶴屋南北『東海道四谷怪談』などの歌舞伎における人物造型が投影されているが、与太郎とお都賀の「夫婦の絆」には歌舞伎にない柳浪の独自の世界があらわれていることを指摘している。

第三章「広津柳浪『亀さん』論——野州烏山の近代化と亀麿の悲劇——」では、小説の舞台となる野州烏山の「田舎訛言」が「各種の人物を語勢語風などの上で、自然と目にうつるやうに」「其の性質、地位、境遇に応じて別殊の語気口吻をかき分けたい」とする柳浪の意図にもとづくものであるとし、近代化による烏山町の社会構造の変化、東京者とされる「蝮蛇のお辰」の位置づけ、地域社会から排除されていく主人公・亀麿の悲劇を論じ、「烏山の変容こそが、お辰・亀麿などの異質なるものを標的とした排除をもたらした」としている。

第四章「広津柳浪『今戸心中』論——『春色梅児誉美』と吉里の心のあり方——」では、『今戸心中』と為永春水の人情本『春色梅児誉美』の共通性と相違点について、その情景描写、登場人物の会話、意地と弱さが入り混じった主人公・吉里の心情などを考察し、「吉里の平田への恋心から善吉への同情の変化には、「其思い——の人になれて。親しく実意に哀れを知る」という春水の影響が認められるのではないか」と論じている。

第五章「広津柳浪『河内屋』論——妻としての規範から浮かび上がるもの——」では、日本橋横山町で糸店を営んでいた河内屋が、廃業して神田明神下に移ってから家存続への希求を強く保持していたことを指摘し、主人公・お染の「封建時代の女性道徳に従って、夫のためにも、家のためにも犠牲をいとわない姿」、それとは裏腹な心の中での規範への抵抗、義理と情との葛藤という主題が類似する「骨ぬすみ」との対比により、「これらの一連の主人公の悲劇は、世俗の秩序に押さえこまれた弱い立場にあった女たちの悲痛をくっきり浮き彫りにしていく」と捉えている。

第六章「広津柳浪『浅瀬の波』論——お勝の過誤による悲劇——」では、小説の舞台となる深川・洲崎の歴史的地理的な特質を考察し、物語の展開に果たしている江戸端歌の役割、登場人物の造型における人情本との関わり、ひとつの過誤がさらなる過誤を生むかたちでもたらされる主人公・お勝の悲劇的な死について考察し、「洲崎を江戸の面影を残した水郷として鮮やかに描き出した」この小説は、「洲崎新遊廓とそこに生きる人間の特異さが、お勝の過誤による悲劇を可能にした」と論じている。

第七章「広津柳浪『雨』論——『雨』のお八重と「段だら染」のお妻——」では、物語に描かれた芝新網町の貧民街の惨状と貧民ルポルタージュとの関わり、『雨』と類似する歌舞伎における悪婆を連想させる人物造型が見られる『段だら染』との対比により、主人公夫婦の愛情の深さを浮き彫りにし、結末において「柳浪は吉松夫婦の変わらない情愛が続く可能性だけは残した」と結論づけている。

論文審査結果の要旨

自然主義成立以前のリアリズム文学を代表する重要な作家でありながら、研究が立ち後れている広津柳浪の再評価を目指す、平田氏の研究態度はきわめて意欲的であり、柳浪の明治20年代末から30年代半ばの主要作を一つひとつ丁寧に論じたことは高く評価できるだろう。

博士論文に取りあげられた7作品は、日清戦争後に「深刻小説」として脚光を浴びたにもかかわらず、その内実についての詳細な検討は、従来あまりなされておらず、とりわけ近世文学とくに人情本や歌舞伎、江戸小唄などと柳浪の小説との関わりについては、ほとんど手つかずのままだったが、平田氏は江戸文学とのかかわりを中心的な研究テーマに据え、いずれも独自性のある新しい見解を示している。

平田氏は、小説本文の細部にわたる綿密な考証や注釈に長け、『変目伝』論では洋酒店と薬種店の関わり、『黒蜥蜴』論では作品成立の契機となった江戸小唄に着目し、『亀さん』論では野州烏山の「田舎訛言」と社会構造の特質、『今戸心中』論では『春色梅児誉美』における情景描写との関連を実証的に分析した。また、『河内屋』論では日本橋横山町、『浅瀬の波』論では深川および須崎、『雨』論では芝新網町といった作品の舞台空間の地誌的歴史的な特質、遊里や職人や貧民の世界における世態風俗の近世から近代への転換、人間関係や社会構造の変容などについて、資料を博搜して丹念に考証した。さらに、それらの綿密な検討を踏まえたうえで、作品を精細に読み、新しい解釈を提示している。

一つひとつの作品について、人物造型や物語の趣向や表現が江戸文学とどのように関係するかを考証し、小説の世界を詳細に読み解き、あるいはそれまであまり注目されなかった作品にも光を当てて比較検討し、それらを積み重ねることによって広津柳浪の小説の特質を明らかにしようとしていくその実証的な研究スタイルは、きわめて堅実なものであるといえる。

なお、公聴会では、歌舞伎をはじめとする江戸文学の類型的で不自然な設定や人物造型と柳浪の写実の手法との関係についての掘り下げが不足していること、柳浪の近代批判についての評価が曖昧であること、江戸文学との関係づけについてより具体的な論証が必要であること、柳浪の「深刻小説」の定義が明らかでないこと、個別の作品分析にとどまり広津柳浪の文学の全体像が十分に示されていないことなどが指摘され、一層の究明を望むという意見が出された。

以上のように、今後の課題とするべき点はあるものの、平田氏が本論文において広津柳浪文学の研究に真摯に取り組み、新たな知見を加えたことは評価できる。

平田氏は、2013年9月に本学大学院博士後期課程に入学して以来、3年9ヶ月ほどの間に、査読のある学術論文6本、学内外の学会での研究発表4回（うち1回は海外における国際学会）があり、それらの研究成果をまとめた本論文は、専門の分野において自立した研究者としての十分な能力を示すものといえる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。